



このコーナーは、文書館に保存している古い写真を皆さんに紹介します。



懐かしの1枚

松竹座

松竹座は、昭和5(1930)年に開館した。戦前は芝居や浪花節などの興行を行っていました。戦後は映画が中心となり、高瀬東映となった後、昭和51(1976)年に閉館しました。

「思い出の1ページ」

写真の松竹座(高瀬町)の隣の千歳旅館で育った白川さん(81)に、当時の思い出を聞きました。「娯楽のない昭和初期。『みんなが楽しめる場所を提供したい』と父の秋田計一と気心の知れた友人たちの3人が、松竹座を建てたと聞いています。『興行で来てくれる役者さんが泊まれるところを』と、うちは旅館を営んでいました。父は役者を本当に大事にしており、生きがいをも感じていたように思います。夜の11時や12時に役者さんの芝居が終わると、お風呂を焚いたり、ごはんを用意したりと家族中で接待したことが懐かしいです。松竹座は桝席や2階席もあり、琴平の金丸座のような造りで、多いときは500人ものお客さんが入っていました。5時頃になると、客寄せ太鼓が勢いよくドンドコと鳴り響き、特に夜は若いメオト連れが当時の着物姿で来て憩いの場となっていました。皆、芝居を見に行く事を楽しみに夜遅くまで一生懸命働いていた光景を思い出します。娯楽のない時代であった分、人と人との絆が深

く、人情味に溢れていたように思います」

編集 後記



3月14日、3歳の誕生日を迎えたみとよ地域応援キャラクターの『みとよん』に肩書きが付きました。『みとよん』みずからが指名した肩書きは、『三豊市知名度向上プロジェクト主任研究員』。決めた理由は「知的でカッコいいから!」...これからは知的路線で活躍するのか?!

みとよ青年会議所のキャラクターとして誕生した『みとよん』ですが、今は市内に限らず、全国に活動範囲を広げて、精力的にイベントに参加し、三豊市の知名度向上に貢献してくれています。ダンスが得意ということで、機敏な動きでイベントを盛り上げていますが、今後はふるさと大使のお二人とのコラボなんてこともあるかもしれませんね。

カッコいい肩書きからは想像できない、ぽっこりおなかがかわいいう『みとよん』に会ったときは、声を掛けてあげてくださいね。